

東日本大震災子ども支援募金

ユネスコ協会

就学支援奨学金

レポート 2024



公益社団法人
日本ユネスコ協会連盟

東日本大震災から 14年目を迎えて

公益社団法人日本ユネスコ協会連盟

会長 佐藤 美樹



東日本大震災の発生から14年の歳月が流れました。

この大震災で犠牲となられた皆さまに、改めて深く哀悼の意を捧げます。また、長きにわたり復興に向けて歩み続けてこられた被災地の皆さま、そして困難を乗り越え新たな歩みを進められている方々に、心からの敬意と連帯の思いを表します。

日本ユネスコ協会連盟では、震災発生当初より、被災地の子どもたちの学びを支えるため「ユネスコ協会就学支援奨学金」の取り組みを続けてまいりました。2024年度も引き続き、奨学金を通じて多くの子どもたちが、希望をもって勉学や部活動に励むことができました。この14年間で、全国の皆さまからお寄せいただいたご支援により、延べ約4000名の子どもたちが夢をあきらめることなく、それぞれの目標に向かって努力を重ねてきました。

ここに、1年間の活動報告とともに、奨学生やご家庭の声、そして現在の被災地の様子をお伝えいたします。

自然豊かな日本に暮らす私たちは、一方で、常に自然災害のリスクと向き合っていかなければなりません。とくに、災害の影響を大きく受けやすい子どもたちへの支援は、今後も決して途切れることなく継続されるべき重要な取り組みです。

私たちは、東日本大震災で得た教訓を礎に、「災害子ども教育支援」事業として支援の対象を全国へと広げ、各地で起こる自然災害によって困難な状況に置かれた子どもたちに対し、教育を中心とした復興支援活動を今後も継続してまいります。

私たちの活動にご賛同いただき、ご協力を賜りましたすべての皆さまに、心より感謝申し上げます。今後とも、日本ユネスコ協会連盟の活動にご理解を賜りますとともに、変わらぬご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

・ 2024年度実績 ・

受給者数

409名

奨学金給付額

9816万円

2011年度からの累計給付人数

3977名

累計給付額

27億7684万円

・ 支援概要 ・

対象者

東日本大震災による地震や津波で家屋が流失・損壊したり、原子力発電所事故の影響により避難を余儀なくされるなどして、経済的に困難な状況にある家庭のうち、高等学校への進学を希望する子どもたち。

※震災により保護者を亡くした子どもたちは別事業「MUFG・ユネスコ協会 東日本大震災復興育英基金」の対象です。

給付額および給付期間

奨学生一人あたり月額2万円を、3年間にわたって給付します(返還不要)。

※給付対象期間は、中学3年次から高校2年次までです。

対象地域

岩手県・宮城県・福島県のうち、東日本大震災による被害がとくに大きかった市町村を特定し、対象としています。

東日本大震災子ども支援募金 ユネスコ協会就学支援奨学金レポート2024

ごあいさつ	01	被災地のいま	09
活動概要	02	被災地の教育復興	11
奨学生レポート1 福島県会津若松市	03	私たちが14年間で取り組んできたこと	12
奨学生レポート2 岩手県大船渡市	05	災害子ども教育支援	13
奨学生レポート3 宮城県石巻市	06	会計報告	14
奨学生レポート4 福島県大熊町	07		

表紙のひまわりについて

津波によって流れ着いた1粒のひまわりの種が、宮城県石巻市門脇町にある「頑張ろう! 石巻」の看板のそばで芽吹き、2011年夏に花を咲かせました。津波や塩害にも負けず、力強く咲いたひまわりは『ど根性ひまわり』と呼ばれ、毎年数を増やしています。

東日本大震災を機に始まったユネスコ協会就学支援奨学金事業が、最後の年を迎えました。震災以来14年、奨学金は、さまざまな困難を抱えた家庭の子どもたちの教育を支えてきました。被災地で、あるいは新たな故郷となった避難先で、将来への夢を描く奨学生と、彼らを見守ってきた保護者の声をお届けします。

新しい「ふるさと」で 充実した高校生活をおくっています



菅原美月さん 高校3年生
福島県会津若松市

好きな教科は英語、海外にも行きたい

菅原美月さんが震災後、家族とともに会津若松市に来たのは3歳のとき。以来ずっと会津若松で育ち、学校に通ってきました。出身地の大熊町から同じように避難してきた友だちもいますが、いま親しくしているのはこちらでできた友だちだそうです。

「高校には違う中学からいろいろな人が来て、お互いに高めあえる友だちができました。勉強法を教えてもらったり、新しい発見があったりして、すごくいいなと思います」

大熊町には、震災で事故を起こした福島第一原子力発電所が立地しています。美月さんの家は帰還困難区域内となったため、15歳になるまで帰ることができず、解除後に訪ねたとき、家はすでに壊され更地となっていました。

「『ここが家だったよ』とか『ここが保育所だったよ』とか聞いて。家に柚子の木があったり、犬と遊んだりした記憶はあります」

ただ、もの心ついてからずっと会津若松にいたので、大熊より会津の方が自分の故郷という感覚になりました。会津でも、幼稚園までは大熊町から移転してきた園に通っていましたが、小学校からは会津若松市内の学校に。以来、大熊町との

接点はさらに少なくなりました。これについては、お父さまが事情を話してくれました。

「長男が幼稚園のとき、会津に避難していた友だちが、親の仕事の関係で次々といわき市などに引越して行きました。あるとき、泣き出してしまって『仲よくなると友だちがいなくなっちゃう。僕、何か悪いことしてるのかな』というんです。震災で傷ついているのに、生活の中でこんな思いをさせてはいけないと、小学校からは友だちと離れ離れにならずにすむ会津の学校に入れたんです。同じ思いで、美月も小学校からは会津の学校に入れました」

いまでは地元で友だちがたくさんできて、美月さんも高校生活を謳歌しています。好きな教科は英語で、すでに英語検定の2級を取得。今年3月には大熊町の海外派遣事業で、他の中高生たちとオーストラリアにある姉妹都市バサースト市を訪ねました。8日間のホームステイ体験はとてもし有意義だったようで、また同地に行きたいと考えています。

「人との関わり方が日本と違ってオープンなので、誰とでも仲よくなれるのがいいなと思いました。また、第二次世界大戦のとき日本人の捕虜収容所があったカウラという場所では、戦争のことや日本とオーストラリアの関係を知ることができて、とても心に残っています」

高校では毎時間のおやつタイムにびっくりし、授業で現地の高校生とサッカーをしたのも楽しい思い出となりました。

「会津若松は、自然がありつつ学ぶ環境も整っていて、楽しいところがいっぱいあるのがいいと思います」

海外派遣事業でオーストラリアのバサースト市を訪問。現地できた友だちとはいまもSNSで交流が続く(左手前が美月さん)

「奨学金のおかげでとても充実した高校生活を送れています。これからは私が社会に貢献できるように頑張りたいと思います」



人の心を軽くしてあげられる仕事に

高校3年生となり、部活のソフトテニス部はすでに引退しました。高校生活が濃い日々となったのは、その部活のおかげだそうです。とくに今年は、インターハイの地区大会で、美月さんのペアが団体戦で勝利し、優勝に貢献しました。「それまでは自分は勝てなかったので、勝って部に貢献したいという気持ちが強かった。だから最後に勝つことができ、いままでの集大成となってすごく嬉しかったです」

部活の練習と勉強の両立に悩んでしまい、学校に行けなくなったこともありましたが。それでも最後まで部活を続けられたのは、仲間にもまれたからだといいます。「それと、2年生から後輩と組んだので、後輩には迷惑をかけられないと、気持ちを切り替えて頑張りました」

部活で悩んでいたときだけでなく、学校生活で悩みを深めたときに、美月さんの心を軽くしてくれたのはカウンセラーの先生でした。その経験もあって、大学では行動心理学を学び、将来は学校や会社のカウンセラーになりたいという希望を抱いています。

「昔から人の悩みとか相談を聞くのが好きで、相手の心を軽くしてあげられる人になりたいと思っていました。友だちの笑った顔を見たり、『ありがとう』といわれたりするとすごく嬉しいです」

普通に将来を考えられることに感謝!

お父さまは大熊町の職員で、震災当時は目の回る忙しさでした。一方、お母さまは介護職で、家族よりまず入所者の方を避難させなければなりませんでした。そのため、幼い美月さん兄妹は、同居していた祖母とともに、親戚のいた東京から新潟と避難を続け、一時は家族バラバラで暮らさざるを得なかったといいます。

「みんなあちこちに分散しましたが、そのときできる人ができることをやって、力を合わせていました」とお父さま。

その後、大熊町役場が会津若松市に移転し、家族が会津と一緒に暮らせるようになったのは震災1ヵ月後のことです。「一度は大熊町から人がいなくなり、誰も住めなくなって、もう二度と故郷には住めないと思っていました。でも除染によって空間線量が下がり、徐々に人が戻っています。最近子どもたちの声が聞こえるようになり、着実に一步一步復興が進んでいると感じます。そんな故郷を大事にしていけたらなと思っています」

大熊生まれの大熊育ち、いまも大熊で働くお父さまの気持ちです。奨学金については次のように話してくれました。「参考書、修学旅行、部活など、皆さまのご支援をいただいて、美月は充実した高校生活をおくれました。自分の将来をしっかり考えられるようになって嬉しいし、そういうことを普通に考えられることが、ご支援のおかげだと思って感謝しています」

二度の自然災害を乗り越えて なりたい自分を目指す



ひより
金野陽由さん 高校2年生
岩手県大船渡市

高校生になり自分で考えることが増えたとか。「クラスの話し合いでも積極的に意見をいえるようになりました」

「部活をやっているときは自分の時間がなかったので、辞めたらアルバイトとかやりたいです」



瓦礫が片付けられ、町には新しい商業施設や公園ができていました。「大船渡は明るい町になったと思います。いまは震災後にできた防災センターで勉強したり、夢海公園で遊んだりしています」

震災の記憶はないけれど

金野陽由さんが暮らす大船渡市は、東日本大震災で大きな被害を被った上に、2025年の春は長引く山林火災に苦しめられました。震災のときは2歳で何も覚えていない陽由さんですが、山林火災で避難生活をおくったことで、いのちの大切さを学んだといいます。

「私にとって初めての記憶に残る災害でした。家が燃えてしまったらどうしよう、どうやって身を守ろうと考えました」

この山林火災では、陽由さんの友だちの家が全焼しました。震災のとき津波で家が流され、新たに建て直した家だったそうです。「言葉もない」というお母さまは、火災当時を振り返ります。

「まさか人生で、こういうことが二度あるとは思いませんでした。あるとき雨が降らなかったら、うちもダメだったかもしれせん」

14年前の震災時、お母さまは保育所などにいた幼い二人の子を迎えに行き、そのまま海の近くの家に向かいました。「大きい波が来てるから、もっと上へ逃げろ」という声に促され、家を通り過ぎて高台へ。幸い、自宅はかろうじて津波被害を免れたものの、電気、ガス、水道が止まり、その後は不自由な生活が続きました。入浴も数週間できず、皮膚の弱い陽由さんのために、避難所の人たち優先だった自衛隊のお風呂に入れてもらっていたそうです。

そんな記憶もない陽由さんがもの心ついたころには、既に

新たな夢に向かって

陽由さんは高校進学するとき、小学4年生から続けてきたテニスをするため強豪校を選びました。けれども厳しい練習が続く中、肘をけがして思うようにボールが打てなくなり、次第に精神的に追い詰められていったといいます。

「体調を崩すようになり、限界かなあと。いままで頑張ってきたことを見極めて、先生にも相談した上で退部しようと決めました」

この決断を、お母さまは「ずっと続けてきたのに、引き際を自分で決めることができ偉いと思う」とねぎらいました。奨学金については、高校の入学準備や定期代のほか、テニスの遠征費などもその中からやりくりしてきたそうです。

「本当に助けられて、娘も安心して学校に通えているので、感謝しかありません」とお母さま。

さて、退部を決めて気持ちを切り替えたいと、陽由さんには新たな夢があります。

「中学3年生のとき、助産師さんの講話で子どもが生まれる瞬間のお話などを聞いて、私も助産師になりたいと思いました。生命の誕生をサポートする仕事って、すごいなあと思います」

高校生活は折り返し地点。看護学校のオープンスクールに行くなど、なりたい自分に向かって着々と歩み始めています。

吹奏楽がいま、 僕らの中心

奥に見えるのは宮城県出身の漫画家、故・石ノ森章太郎の構想でつくられた「石ノ森萬画館」。萬画館を望む位置に、石ノ森の分身といわれる「ジュン」のモニュメントが



蓮さんが石巻で好きな風景は、夕暮れどきに日和大橋から眺める海と製紙工場。夜は明かりが灯って幻想的になるそう

北上川河口部に架かる日和大橋から、2022年に開通した石巻かわみなと大橋を望む。ここから猫で有名な田代島などへのフェリーが出ている

齊藤蓮さん(仮名) 高校2年生
宮城県石巻市

皆で演奏するとハーモニーになる

歴史が好きで、戦国時代の武士やお城に興味があるという齊藤蓮さん。とくにいいなと思う君主は上杉謙信だそうです。「私利私欲ではなく、ちゃんと領民のためを思って戦うか戦わないかを判断しているところが好きです」

歴史だけでなく、数学では学年で2位になるなど、優秀な成績をおさめています。その一方で、高校生活が100%だとしたら、90%以上を占めるというのが部活の吹奏楽です。蓮さんの担当楽器はトロンボーン。夏のコンクールでは、強豪校を地区大会で破り金賞を獲得。県大会でも銀賞をとりました。「その強豪校は人数も多いんですけど、僕らは技術面でカバーできたと思います」

吹奏楽は、チーム皆の音と一緒に一つ一つの演奏をつくり上げます。だから、一人で練習するより、皆で演奏する方が圧倒的に楽しいといいます。

「一人で吹いていると音はひとつしかないけれど、皆で演奏するとハーモニーが出来上がって、音が立体的なんです。初めて皆で合奏したときは、感動して鳥肌が立ちました」

休みの日でも吹奏楽のことを考え、音楽を聴くときも、ずっと吹奏楽の曲を選んでいるのだとか。部活で年に1回、学校でバーベキューをするのも楽しい思い出となりました。

将来はパイロットになりたい

蓮さんが震災に遭ったのは2歳のときです。家は津波で流出し、家業の農業で使っていた田畑なども被災しました。家を失い、収入も絶たれたため、お母さまは幼い蓮さんと生後間もない妹を連れて、東京の実家に身を寄せました。しかしストレスがたたり、震災のあった3月の末に脳出血で倒れてしまいます。以後、5回もの手術を経て石巻で暮らし始めたとき、蓮さんは5歳になっていました。お母さまは当時を振り返ります。

「東京での闘病生活が長引いたため、蓮は保育園をたらい回しにされ、私もずっとついていてあげられなくて、きつかったと思います。いちばん震災のしわ寄せがいったのは蓮ちゃんかもしれませんが、何とか乗り越えてきてくれました」

病気がなかなか回復せず、家業も復興途上の中、蓮さんのために奨学金を受給できたことで、とても安心できたといいます。

「本当に気持ちが救われました。皆さまには感謝していますし、体にも心にも元気をいただいた気がします」

ご両親の思いを受け、充実した高校生活をおくる蓮さん。高台にある学校からは、ときおりブルーインパルスが旋回するのが見えるそう。それもあって将来は航空関係の仕事、とくにパイロットになりたいとか。歴史が好きなので社会科の教員免許もとりたいし、吹奏楽の関係で自衛隊の音楽隊もいかなと思っています。夢は広がる一方ですが、いずれにしても、将来は子どものために役立つ大人になりたいといいます。

「子どもがいないと、国や地域って発展しないですよ。だから、次の世代のために、何かしてあげられる人になりたいです」

大人になっても 大好きな大熊町で 子どもたちと 接していきたい



文系ですが好きな学科は化学基礎。
「先生が面白いし、実験もたくさんあって
楽しいです」

石井^{のの}堃乃佳^かさん 高校2年生
福島県双葉郡大熊町

高校のカフェ活動が楽しくて

東日本大震災が発生するまで、福島県双葉郡内には5つの高校がありました。ところが、震災と原発事故によってどこも存続できなくなってしまったため、双葉の教育の灯を絶やしてはならないと、2015年に中高一貫校が開校されました。石井堃乃佳さんはこの高校の2年生。地域に開かれた自由な校風の中で、のびのびと高校生活をおくっています。中でも、社会起業部という部活で取り組んでいるカフェ活動が、とても楽しいといいます。

「学校にカフェがあって、放課後の5時から6時まで生徒がドリンクやお菓子を提供しています。メニューを自分たちで考えるのが楽しいし、地域の方たちも結構いらっしゃいます」「探究」でも、カフェと地域のつながりを大切に活動を考えています。大熊町の子どもたちと一緒にクッキーを作り、カフェで提供する楽しさを知ってもらいたいのだそうです。「私の故郷、大熊町の子どもたちは、まだ公園や遊具があまりない状況なんです。だから、少しでも子どもたちと楽しい時間を過ごせたらいいなと思いました」

子どもたちとのクッキー作りは、大熊町にある母校の義務教育学校の場所を借りて、夏休みにやる予定だそうです。

父とほとんど会えない日々

堃乃佳さんが大熊町で被災したのは2歳のときでした。震災後すぐに原発事故が発生したため、全町避難となり、一家は田村市の体育館へ。そこで1ヵ月半ほど過ごした後、会津若松市内の旅館や仮設住宅などで避難生活をおくりました。ただし、福島第一原発に勤務するお父さまは、震災後、とくに原発事故後は、ほとんど家族に会うことができなくなりました。放射線管理員として現場の作業員を守る仕事をしていたためです。

「携帯を机に置いたまま現場に出ていたの、家族の安否もわからないまま、2週間くらい缶詰になっていました。あるとき、知り合いに『石井さんの家族を田村市の体育館で見た気がする』といわれ、無理をいって2日ほど抜けさせてもらいました。そこで初めて家族と対面できたんです」

お互いに無事は確認できたものの、すぐ現場に戻らなければなりません。けれども、当時、小学6年生だった堃乃佳さんの兄が、心配して「戻っちゃいやだ」と引き取めました。当時、彼はスポーツ少年団でバスケのキャプテンをしていました。そこで、「困っている仲間がいるのに、見捨てるのか」と諭すと、わかってくれたそうです。

「そのとき息子が『ひとつだけ約束して』というので、何だろうと思ったら『絶対、帰ってきてね』と。その言葉に勇気づけ



「学校にカフェがあることを、
双葉郡の多くの人に知ってもらって
来てもらいたいです」

心に残っているのは文化祭。
「レトロカフェという昭和っぽいカフェを出店し、
クラスの皆で協力する楽しさを知りました」



られて、仲間のもとへ戻りました」

以来、お父さまの単身赴任は10年以上続きました。家族揃っての生活が再び始まったのは、2年前、埜乃佳さんたちが会津若松から大熊町の復興住宅に移ってからのことです。

大熊町も母校も大好き

埜乃佳さんは会津若松で、大熊町から移転してきた幼稚園と小・中学校で学びました。それらが一緒になって、2022年に認定子ども園・義務教育学校がスタート。翌年2学期には大熊町にできた新校舎へと移転します。埜乃佳さんは、そのタイミングで家族とともに大熊町に戻ってきました。既に中学3年生になっており、あまり馴染みのない大熊町へ戻るのが不安はあったそうです。

「でも、実際に戻ってみたら、生活するうちにだんだん慣れてきて、会津から戻った友だちも優しくしてくれて、やっぱり大熊に戻ってきてよかったなあと思いました。大熊が大好きです」

高校と同じく、自由な校風の中学校で学べたこともよかったといいます。

「私の母校は、ほかの学校とは全然違って、最初のころはこれが学校かなって戸惑ってました。でも、先生たちは熱心に教えてくれるし、友だちとの距離も近くて楽しい学校でした」

いまでは、友だちと遊ぶときはいつも母校で待ち合わせ。大熊町でいちばん好きな場所もこの学校だそうです。

いったんは故郷を追われて都会の会津若松で育ち、再び自然豊かな大熊町に戻ってきた埜乃佳さん。制服やカバンなど、学校に関わるいろいろなことに奨学金を役立てているそうです。震災まで大熊で住んでいた家は、2世帯住宅を建ててわずか1年半で被災。中間貯蔵施設の区域内になってしまったため、今年、無念にも取り壊すこととなりました。原発事故後ずっと廃炉業務に従事するお父さまは「震災によって、我々以上に困っている方もいらっしゃると思います。その方々や私たちにも、奨学金という形でこのように手を差し伸べていただけるのは、本当にありがたいことだと思っています」と話してくれました。

子どもが好きな埜乃佳さんがなりたい職業は保育士。中学3年生のとき、ある保育士の方に、なぜその仕事を選んだのか尋ねると「子どもたちが成長する力になりたい」といわれたそうです。

「その言葉がとても心に響いたんです。その方とは別ですが、幼稚園のときお世話になった憧れの先生が、いまは認定子ども園も併設している母校にいて、たまに会いに行くと優しく接してくれます。その先生みたいに、子どもたちに寄り添える保育士になりたいです。そして、保育士になったらまたここに帰ってきて、大熊の子どもたちが元気に成長する力になりたいです」

被災地のいま

2025年春から夏にかけて、岩手・宮城・福島の沿岸地域を訪ねました。

それぞれの土地に、あの日から歩み続けてきた人びとの想いと記憶が息づいています。

記憶を風化させず、次の世代へとつないでいくために、

14年目の被災地の「いま」を写真でお伝えします。



1

岩手県下閉伊郡山田町 織笠漁港

穏やかな山田湾は貝類養殖の拠点。津波で壊滅的な被害を受けたものの、地域の尽力により早期に復興が進んだ。地元漁師の方が愛情を込めて育てる牡蠣やホタテは、三陸の復興のシンボルとして多くの人に親しまれている



宮城県東松島市 東松島市震災復興伝承館

震災当日まで仙石線の野蒜駅だった駅舎は、現在、東松島市震災復興伝承館に。館内にある折り鶴アートは、全国から応援のために送られた折り鶴と、感謝や希望を込めて新たにつくられた折り鶴と一緒に、作品として封印したもの。暗い展示室で幻想的に輝く



5

岩手県上閉伊郡大槌町 蓬莱島(ひょうたん島)

島の先端にある灯台は震災で倒壊し、後に再建。弁天神社のお堂は残った。漂流する島を舞台にしたNHKの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルの一つといわれ、町の防災無線ではテーマ曲が流れる。『苦しいこともあるだろさ 悲しいこともあるだろさ だけどぼくらはくじけない〜♪』



2



3

岩手県釜石市鵜住居町 鵜住居駅 三陸鉄道リアス線

巨大津波によって壊滅的な被害を受けたリアス線は、全面的な復旧工事を経て、2014年春に全線で運行を再開。車両では、マンガ「ゴルゴ13」のキャラクターが「ポイ捨てをするな」と睨みをきかせている

7

東日本大震災の悲劇を教訓に
地震がきたらとにかく逃げろ！
からぶつてもいんでねえの
助かれば！！
令和元年五月 閉上日和山町内会有志一同

宮城県名取市閉上

閉上日和山有志一同による石碑

「地震がきたら、とにかく逃げろ！（たとえ津波がこなかったとしても）」という教訓が刻まれた石碑があるのは、名取市震災メモリアル公園。園内には鎮魂ゾーンや伝承ゾーンなど5つのエリアがあり、それぞれが震災の記憶と教訓を伝えている

4



宮城県石巻市 石巻川開き祭り

川の恵みに感謝し、先祖を供養するため、大正時代から続く市内最大の伝統行事。震災以降は毎年慰霊の時間が設けられている。陸上行事の締めくくりはこの大漁踊り。まちは大勢の子どもや若者で賑わっていた



宮城県仙台市若林区荒浜 荒浜灯籠流し

100年以上続く夏の伝統行事。津波を警戒して明るい時間に行われていたが、2018年から夜の灯籠流しが再開された。会場近くには震災遺構となった荒浜小学校があり、反対側は広大な海。読経とともに、鎮魂の願いを込めて灯籠が浮かべられ、最後は地区の犠牲者数と同じ192発の花火が夜空を彩った

福島県双葉郡浪江町

震災遺構 浪江町立請戸小学校

福島県内唯一の震災遺構である請戸小学校。地震発生から40分後、最大15.5mもの大津波が押し寄せ、高さは2階の床さまで及んだ。見晴らし台には津波到達点が表示され、時計は到達時刻の15:37を指したまま。自然の猛威をいまに伝える



福島県双葉郡浪江町
福島県復興祈念公園(見晴台)

双葉町と浪江町の境に整備中(2025年事業完了予定)の福島県復興祈念公園には見晴台がある。高さは11mで、いちばん上には、この地域に押し寄せた最大の津波高16.5mの標識が、公園の中核となる「追悼と鎮魂の丘」からは、東京電力福島第一原発の排気筒なども見える予定だ

福島県双葉郡富岡町 夜ノ森桜トンネル

約420本の桜並木が2.2kmにわたって続く夜ノ森は、福島県を代表する桜の名所。震災後は立ち入れなかったが、2022年より全ての桜が観られるように。本プログラムの奨学生たちも好きな場所として挙げる心の拠り所だ。毎春、人びとを魅了する桜トンネルは、被災地の未来を見守り続けていく

写真提供：一般社団法人富岡町観光協会





大熊町立 学び舎 ゆめの森
南郷市兵校長・園長

東日本大震災直後から被災地の教育復興に尽力し、

現在は義務教育学校・認定子ども園「学び舎 ゆめの森」の

校長・園長を務める南郷市兵氏に、教育が目指すものについて伺いました。

学びと地域復興の 相乗効果を目指す

震災当時、私は文部科学省の職員で、岩手・宮城・福島の学校支援を担当していました。その中で、いちばん先が見えなかったのが、原発周辺に位置する福島県双葉郡の8町村です。いつ帰還できるかわからない状況で、そこにある学校教育をどうしていくか。8町村で協議し、「福島県双葉郡教育復興ビジョン」を策定しました。掲げたのは、原子力災害という未曾有の災害を、背景も含めしっかり受け止めること。その上で、新しい価値観を持った、未来を切り拓く力を育む学校をつくることでした。

2015年、中高一貫校の県立「ふたば未来学園」が開校しました。私は国からの出向という形で未来学園の副校長に。しかし、学校はつくって終わりではなく、不断の継続する営みです。それで、8年後に文科省を辞め、福島県の教員になりました。そして、「教育復興ビジョン」の理念を継承した義務教育学校・認定子ども園「学び舎 ゆめの森」が会津若松市から大熊町に戻るタイミングで、校長と園長に着任しました。

根っこはすべてESDにある

ふたば未来学園では、すべての生徒が自分のテーマを決め、地域の課題解決について6年間徹底的に学習します。また、双葉郡8町村の全小・中学校とふたば未来学園とで「ふるさと創造学」に取り組んでいます。そうやって地域に出て行き、

地域の価値を知ると、子どもたちは皆、自分だけでなく、自分の町や社会がよくなってほしいと思うんです。すると、役に立てることを考えて、思いもよらないアクションを起こす。その結果、地域が活性化する。学びと地域復興の相乗効果です。これは決して特別な地域の特別な学校だけの取り組みではなく、根っこはすべてESD(持続可能な開発のための教育)に謳われていることです。被災した東北沿岸部で最も早く教育復興が進んだのは、宮城県気仙沼市などでESDを実践するユネスコスクールでした。学校は単に子どもが勉強するだけの場所ではありません。子どもたちは未来の象徴で、町や社会の未来の出発点が学校なんです。さらに、学校が、震災でばらばらになったコミュニティ再生の起点になればいいと思っています。

課題があるとすれば、地域復興のその先が見えないこと。人類はまだ原発事故の処理方法を手に入れておらず、テクノロジーを必死に開発しています。国や東電の責任というのは簡単ですが、事故処理は子どもたちの世代まで続いてしまいます。もっと多くの方が本気で考えないと、地域の未来は本当の意味で開かれていかないでしょう。だからこそ私たちにできるのは、原発の廃炉だけでなく、世界の紛争や気候変動など、正解のない困難な状況を前向きに切り開いていく力を、子どもたちが持てるようにすること。それが、大人の世代として、彼らに対する責任の取り方だと思っています。

学び舎 ゆめの森では、運動会の代わりにスポーツフェスティバルを開催。地域の人たちと一緒に楽しむ競技を子どもたちが考える



大熊町立 学び舎 ゆめの森

0歳からの認定子ども園と、9年間の義務教育学校の子もたちが、年齢や学年の枠を超えてともに学んでいる。自分の学びたいことを選び時間をかけてじっくり向き合ったり、学ぶ場所や時間割を自分たちで決めたりと、子ども主体の学びを展開。また、地域に開かれた学校で、地域の人びとと交流する機会も多い。子どもの可能性を最大限に引き出す教育方針で、大熊町以外からの教育移住者は6~7割にのぼる。一時は子どもの声が聞こえなくなった大熊町だが、2025年9月1日現在94名の園児児童生徒がいる。

ゆめの森の中心にあるのは開放的な本の広場。ここはホールでもあり、コミュニティスペースでもある



東日本大震災子ども支援

支援活動
01学校への緊急物資支援
(2011年度)

東日本大震災後、学校再開を支援するため、まず緊急物資支援を実施しました。学習備品等が流失した144校と2つの教育委員会に対し、各校のニーズに応じた教材・体育用具などを提供。また、仮設住宅や避難所と学校を結ぶスクールバスの運行支援も行いました。

支援活動
02文化・郷土芸能への支援
(2011～2013年度)

震災で存続が危ぶまれた東北の祭りや郷土芸能を守るため、「未来遺産運動」の一環として支援を実施。地域の文化を未来へつなぐ取り組みとして、被災地のニーズに応じ、祭りや郷土芸能の再開に必要な物資支援を行いました。

支援活動
03心のケア支援
(2011～2015年度)

地震と津波による恐怖や不安を抱えた子どもたちの心のケアを目的に、夏休みにキャンプや絵画コンテストなどの体験活動を実施。活動や表現を通じて、子どもたちの心理的ストレスの軽減を図りました。

支援活動
04社会教育・コミュニティ支援
(2011～2018年度)

仮設住宅での生活などにより大きく変化した被災地の暮らしに対応し、地域コミュニティの再生を支援。コミュニティ図書館や学童保育所、移動図書館車、相撲場の整備・支援を通じて、学びや交流の場づくりに取り組みました。

支援活動
05奨学金支援
ユネスコ協会就学支援奨学金
(2011年度～継続中)

被災により経済的に困難な状況にある家庭の子どもたちが、安心して学びを続けられるよう、返還不要の奨学金を3年間にわたって給付する支援を継続しています。

支援活動
06奨学金支援 MUFU・ユネスコ協会
東日本大震災復興育英基金
(2011年度～継続中)

震災で両親またはいずれかの保護者を亡くした、または行方不明となった子どもたちを対象に、返還不要の奨学金を高校卒業まで給付しています。さらに、「TOMODACHI・MUFU国際交流プログラム」などを通じて、子どもたちの心の成長や国際的な視野を育む支援も行いました。

支援活動
07アクサ ユネスコ協会
減災教育プログラム
(2014年度～継続中)

「1人の先生が学べば、100人の生徒が学べる。」東日本大震災をはじめ、全国の災害被災地の経験や教訓を学校の防災・減災につなげるために、学校への活動助成、教育研修会、実践報告会を継続して実施しています。

支援活動
08災害子ども教育支援
(2021年度～継続中)

「東日本大震災子ども支援」の後継事業として、国内で大規模な自然災害が発生した際に、被災地の教育現場や子どもたちの学びを支援。子どもたちがいつでもどおりの学校生活を送り、進学や夢をあきらめずに未来へ進めるよう支援を行っています。



※事業の詳細はP13をご覧ください。

いつか起こる災害から
子どもたちの未来を守るために。

災害子ども 教育支援

当連盟では、今後も東日本大震災の教訓を生かし、
全国で増加が懸念される大規模災害が発生した際に、
被災地の子どもたちの学びを支える教育支援を実施していきます。
被災地の教育支援事業へのご寄付は、対象を日本全国に広げた
「災害子ども教育支援」で引き続き受け付けています。
2024年度より「令和6年能登半島地震」被災地への教育支援を行っています。

①
被災地の
学校等に対する
教育復興のための支援

②
被災地の
子どもたちに対する
給付型の奨学金支援

支援内容

③
被災地の復興を支える
ユース・ボランティア活動に
対する支援

令和6年能登半島地震で破損して使えなくな
った電子黒板や体育の授業で使用する備品
などの購入費用を、石川県内の35校に支援



電子黒板

日本ユネスコ協会連盟の皆さま
ご支援ありがとうございます！大切に使用させていただきます。
(志賀町立富来小学校から届いたメッセージ)



ライン引き



跳び箱運搬車



大きな災害が起きても、子どもたちの
学びが継続できるよう、教育を守る
環境づくりを進めていきます。今後と
も、皆さまの温かいご支援・ご協力をお
願いします。

※日本ユネスコ協会連盟へのご寄付は、寄付金控除などの
対象になります。

都度のご寄付

郵便振替・銀行振込・クレジットカードにより、
ご自身のタイミングで寄付いただく方法です。
同封の払込取扱票もご活用ください。



『月1・いいことプログラム』

口座振替またはクレジットカードにより、毎月
決まった金額を寄付いただくプログラムです。
ホームページから直接お申込みいただけます。



「月1いいこと」検索 unesco.or.jp

遺贈

遺言によりご自身の財産を贈与(寄付)いただく方法です。
不動産の遺贈や相続財産の寄付などのご相談もお受けして
います。ご希望の方には、お手続き方法を掲載した資料
をお送りしますので、当連盟までご連絡ください。

〒150-0013

東京都渋谷区恵比寿1-3-1 朝日生命恵比寿ビル12階

公益社団法人日本ユネスコ協会連盟

TEL:03-5424-1121(9:30~17:30/土・日・祝日を除く)

メール:nfuaj@unesco.or.jp(代表)

kodomo@unesco.or.jp(災害子ども教育支援担当)

ホームページ:<https://www.unesco.or.jp/kodomo/>

東日本大震災 子ども支援募金

※ユネスコ協会就学支援奨学金は、原則として、奨学生1人につき3年間にわたって支援します。
※次期繰越金は、2023年度に採用した奨学生の3年目分の給付に係る事業費用などを含む2025年度の本奨学金事業に使用されます。

ユネスコ協会就学支援奨学金

(2024年4月1日～2025年3月31日)

(単位:円)

項目	金額
前期繰越	178,593,854
寄付額	0
支出額	103,347,536
①奨学金	98,240,000
②事業経費	5,107,536
次期繰越	75,246,318

子どもたちの学びを支えてくださった皆さま

ユネスコ協会就学支援奨学金は、2011年度の開始以来、数多くの企業・団体の皆さまをはじめ、多くの方々のご支援に支えられてまいりました。この場をお借りして、心より御礼申し上げます。

個人募金者の皆さま

全国の個人募金者の皆さまから、多くのご支援をいただきました。

企業・団体の皆さま

企業・団体の皆さまからも、たくさんのご協力をいただきました。

子どもたちから子どもたちへ

保育園から大学まで、子どもたちや学生の皆さまからも、心のこもったご寄付が寄せられました。

会員の皆さま

ユネスコ協会・クラブのほか、維持会員・賛助団体会員・個人会員の皆さまからも、ユネスコ精神のもと、力強く温かいご協力をいただきました。

奨学生からおたよりが届きました。 その一部をご紹介します。

3年間にあたって、本当にありがとうございました。給付していただいたおかげで、学校生活を安心して過ごすことができました。主に、私は、部活に力を入れていて、練習を重ね、自分で満足のいく結果もたすことができました。これも、募金していただいた方々のおかげだと思っています。また、今後の目標としては、自分の進路を達成することです。私の将来の夢は、調理師になり、子供から大人までの幅広い世代の方々においしい料理を食べてもらう、笑顔になってもらうことです。そして、私の料理を食べてもらうとともに、その人の居場所となるところもつくりたいと思っています。この夢を叶えられるように、計画的に様々なことをこれからも頑張っていくと思います。改めて、この3年間本当にありがとうございました。

私は最近バスに力を入れています。まだまだ始めてばかりの上手いじゃないですが、日々練習を重ねて上手になっていきます。今年度の目標は「ラストで学年1位」「バスケットボールで文武両方の面で成果を挙げる」ことです。私は募金者の皆さんの思いにこたえるため、今ある日々を大切に、学校で頑張っています。これからも努力をおこなって精進していきますので、これからもご支援、ご協力をお願いします。将来教員になる夢を叶えるために～



(福島県双葉郡双葉町・高校2年)

(宮城県仙沼市・高校3年)

日本ユネスコ協会連盟の活動

私たちは「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」と謳う国際連合教育科学文化機関(UNESCO)の理念に賛同し、全国約270のユネスコ協会・クラブとともに1947年から草の根で活動を続けるNGOです。

平和な世界を構築し持続可能な社会を推進することをミッションに掲げ、国内外でさまざまな活動を展開しています。国連が提唱する持続可能な開発目標＝SDGs(Sustainable Development Goals)のうち、とくに目標4「質の高い教育をみんなに」を重点ゴールに据え、達成に向けて以下のような事業に取り組んでいます。

※2024年度の活動については別冊「2024年度活動レポート」をご覧ください。

いつか起こる災害から
子どもたちの未来を守る
災害子ども教育支援



学校における
減災教育をサポート

アクサ ユネスコ協会 減災教育プログラム



学校との連携を通じた
SDGs教育の充実

SDGs達成に向けた 次世代教育



子どもたちが
夢と希望を抱ける社会へ

U-Smile ～みんなでつなぐ子ども応援プログラム



日本の文化や自然を守り伝え、
持続可能な地域社会に貢献

未来遺産運動



途上国での専門的な技術者の養成、
子どもの文化学習を促進

世界遺産活動



途上国の学びを支える
さまざまな教育支援

世界寺子屋運動



日本ユネスコ協会連盟ホームページ
<https://www.unesco.or.jp>



公益社団法人
日本ユネスコ協会連盟



私たちは持続可能な開発目標(SDGs)を支援しています。